第2章

学校教育目標

耳 塚 寛 明

学校教育目標というと、校長室の額に飾られて長く変わらないというイメージがある。そのため、学校教育目標はその学校の伝統的エートスを表しこそすれ、学校での特色ある教育活動を導いたり、あるいはその反映である可能性は少ないものと考えられてきた。ところが、私たちがこの調査に先立って行ったヒアリング調査では、新学習指導要領の導入をひかえた最近数年間は、学校教育目標に検討が加えられ、教育改革の方向性が理念として盛り込まれたり、教育活動の特色化を進めるうえでのスローガンとして、あらためて位置づけたという声が多く聞かれた。

この章では、現代小・中学校の学校教育目標に使われている言葉に着目して、その頻度を分析し、また類型化を行う。さらに、最近数年間における学校教育目標の検討・修正状況を整理する。

第１節

学校教育目標に含まれている言葉

1.　学校教育目標

学校教育目標のベスト・ファイブは、小学校＝①「心の教育　豊かな心」、②「健康　体力」、③「思いやり」、④「自ら学ぶ力　自己学習力」、⑤「生きる力」、中学校＝①「心の教育　豊かな心」、②「健康　体力」、③「自ら学ぶ力　自己学習力」、④「自立　自主　主体性」、⑤「思いやり」である。

学校教育目標で使われている言葉に注目して、まずは学校での指導がどのような理念を志向しているのかを明らかにしようとした（**表２－１**）。ただし、「学校教育目標」には、「目標を達成するための基本方針」も含み、また、質問紙にあらかじめ提示した言葉だけでなく、類似した言葉の場合にも○をつけるように指示した。33の言葉を設定したが、１校あたりの選択数（33の言葉のうち選択された言葉の数）は、小学校9.7個、中学校9.3個であった。

小学校の学校教育目標で使われている言葉のベスト・ファイブは、①「心の教育　豊かな心」、②「健康　体力」、③「思いやり」、④「自ら学ぶ力　自己学習力」、⑤「生きる力」である。第４位までは、６割程度以上の学校で使われており、普遍的な学校教育目標の理念となっている。

中学校のベスト・ファイブは、①「心の教育　豊かな心」、②「健康　体力」、③「自ら学ぶ力　自己学習力」、④「自立　自主　主体性」、⑤「思いやり」である。小・中学校ともに、「心」→「体」→「学び」の順になっている点は共通している。

小・中学校を比較して、小学校で相対的に多く使われているのは「思いやり」「思考力考える力」「素直　明るい　朗らか」「学ぶ楽しさ」などといった言葉である。逆に、中学校で多く使われているのは、「自立　自主　主体性」「奉仕　ボランティア」「自律　自制」である。

■表２－１　学校教育目標（小・中学校）

（%）

	小学校（642校）		中学校（603校）
心の教育　豊かな心	72.9		70.8
健康　体力	67.8	＞	61.9
思いやり	65.9	＞	53.4
自ら学ぶ力　自己学習力	59.8		61.7
生きる力	46.3		46.3
思考力　考える力	44.1	＞	31.7
基礎・基本	42.5		37.6
自立　自主　主体性	41.3	＜	53.9
意欲　やる気	38.5		35.8
人間性	33.8		33.7
地域　郷土	32.4	＞	26.5
個性　一人ひとり	31.9		29.9
努力　向上心　がんばる	31.6		27.0
素直　明るい　朗らか	29.9	＞	19.2
人権尊重	28.2		29.9
社会性　協調性	27.9		31.5
体験　体験的学習	26.3	＞	18.4
創造性　創造力	25.7		30.2
学ぶ楽しさ	23.2	＞	13.8
基本的生活習慣	20.9		22.4
学力向上　学力定着	20.7		24.9
環境　自然	19.0		14.4
奉仕　ボランティア	15.7	＜	24.0
国際　国際社会	14.8		13.6
共生	14.8		13.1
社会規範　きまり	13.7		17.6
情緒　情操	13.4		15.9
知性　賢さ	12.0		16.7
自律　自制	10.4	＜	20.9
興味　関心	10.4		7.5
情報化社会　情報技術　情報リテラシー	10.1		5.8
学習習慣	8.4		10.8
ゆとり	6.4		4.6

注１）複数回答。
注２）＞、＜は５ポイント以上の差があった項目。

2.　学校教育目標の類型

学校教育目標を類型化してみると、小学校では、①「伝統型」、②「新課程対応型」、③「その他型」、④「全面強調型」の４タイプがある。中学校では、①「新課程対応型」、②「全面強調型」、③「その他型」である。各類型の分布は、地区別に大きな差異があり、地方教育委員会による組織的な指導が存在したことを推測できる。

学校教育目標の設定の仕方にはどのようなタイプ（類型）があるのだろうか。多変量解析の１つであるクラスター分析を用いて、小学校、中学校のそれぞれについて類型化を行った結果が、**表２－２**、**表２－３**である。

まず小学校（**表２－２**）に関してみると、次の４類型がみられた。各類型は、類型名のあとの「言葉」によって、特質づけられる。

①「伝統型」（197校、31.0％）……「健康　体力」「思いやり」「思考力　考える力」「努力　向上心　がんばる」などの言葉。

②「新課程対応型」（176校、27.7％）……「基礎・基本」「心の教育　豊かな心」「生きる力」「地域　郷土」「個性　一人ひとり」「体験　体験的学習」「人権尊重」「基本的生活習慣」「学ぶ楽しさ」「環境、自然」「奉仕ボランティア」「国際　国際社会」などの言葉。

③「その他型」（187校、29.4％）……他の３つの類型のいずれにも含まれないタイプ。

④「全面強調型」（75校、11.8％）……「知性　賢さ」という言葉を除いて、ほぼすべての言葉が使われていると回答した学校。

これらの類型のうち、特に、「伝統型」と「新課程対応型」が対照的である（**図２－１**）。

図に明らかなように、「伝統型」の学校教育目標にあっては、「健康　体力」と「努力　向上心　がんばる」の出現頻度が大きく、「基礎・基本」「生きる力」「個性　一人ひとり」が使われることはまれである。これに対して、「新課程対応型」では、「健康　体力」と「努力　向上心　がんばる」の出現頻度が相対的に低く、「基礎・基本」「生きる力」「個性　一人ひとり」の頻度が著しく大きくなっている。

では、どんな小学校で「新課程対応型」の学校教育目標が設定され、あるいは「伝統型」の目標が保持されているのだろうか。

今回の調査では、地域類型、学校規模等の学校の属性をたずねているが、主要な学校属性と学校教育目標類型の間に明確な関連は認められなかった。

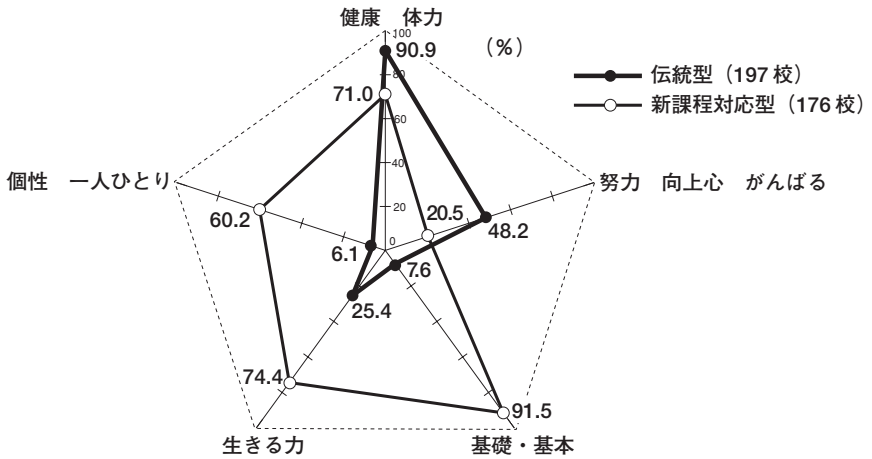
■表２－２　教育目標の類型化（小学校）

（%）

	伝統型（197 校）	新課程対応型（176 校）	その他型（187 校）	全面強調型（75 校）	全　体（635 校）
心の教育　豊かな心	71.6	85.8	55.6	96.0	73.7
健康　体力	90.9	71.0	31.0	97.3	68.5
思いやり	85.8	71.0	29.9	97.3	66.6
自ら学ぶ力　自己学習力	65.0	71.0	32.1	94.7	60.5
生きる力	25.4	74.4	25.7	90.7	46.8
思考力　考える力	58.4	40.3	17.1	86.7	44.6
基礎・基本	7.6	91.5	14.4	93.3	43.0
自立　自主　主体性	28.4	50.0	28.3	90.7	41.7
意欲　やる気	48.7	36.9	11.2	86.7	38.9
人間性	27.9	38.6	19.8	76.0	34.2
地域　郷土	7.1	64.8	8.0	86.7	32.8
個性　一人ひとり	6.1	60.2	12.8	84.0	32.3
努力　向上心　がんばる	48.2	20.5	8.0	76.0	32.0
素直　明るい　朗らか	29.4	32.4	9.1	80.0	30.2
人権尊重	15.7	40.3	13.4	72.0	28.5
社会性　協調性	26.4	26.1	10.7	81.3	28.2
体験　体験的学習	2.5	53.4	3.7	84.0	26.6
創造性　創造力	18.8	25.6	15.0	73.3	26.0
学ぶ楽しさ	11.7	33.0	7.5	72.0	23.5
基本的生活習慣	5.6	34.1	3.7	74.7	21.1
学力向上　学力定着	10.7	27.8	5.3	70.7	20.9
環境　自然	5.6	31.3	4.3	64.0	19.2
奉仕　ボランティア	6.6	26.1	0.5	54.7	15.9
国際　国際社会	1.5	25.0	3.2	56.0	15.0
共生	11.7	19.3	4.8	38.7	15.0
社会規範　きまり	10.7	13.1	2.1	53.3	13.9
情緒　情操	13.2	12.5	4.3	40.0	13.5
知性　賢さ	12.2	13.1	8.6	18.7	12.1
自律　自制	8.1	5.7	2.7	48.0	10.6
興味　関心	1.5	7.4	1.1	65.3	10.6
情報化社会　情報技術　情報リテラシー	1.0	13.1	3.2	45.3	10.2
学習習慣	5.6	8.0	0.5	37.3	8.5
ゆとり	0.5	8.5	1.6	29.3	6.5

注１）複数回答。
注２）33 の選択項目の１つにも○をつけなかった学校（無答不明７校）は分析から除外した。
注３）下線は、その言葉の出現頻度が各類型で特に大きいことを示す。

■図２－１「伝統型」と「新課程対応型」の教育目標の違い（小学校）



ただし、示唆的だったのは、地区（都道府県）によって学校教育目標類型の分布が著しく異なっていたことである（**図２－２**）。たとえば、Ｇ地区では過半数を「伝統型」が占め、「新課程対応型」は４分の１にすぎない。他方、Ｆ地区では、「伝統型」が４分の１にすぎず、４割を「新課程対応型」が占める。「伝統型」が皆無の地区（Ｅ地区）、「全面強調型」が４分の１を超える地区（Ｈ地区）もみられる。

こうした学校教育目標の地域的な差異が出現するのは、地域が持っている学校教育の歴史・伝統・風土が影響を与えているという解釈のほかに、別の解釈も提示できる。

後にみるように、近年は、学習指導要領の改訂を前に学校教育目標の再検討がさかんに行われている時期であった。その際、地方教育委員会による組織的な指導（それがフォーマルなものであれ、インフォーマルなものであれ）が影響を及ぼした可能性がある。

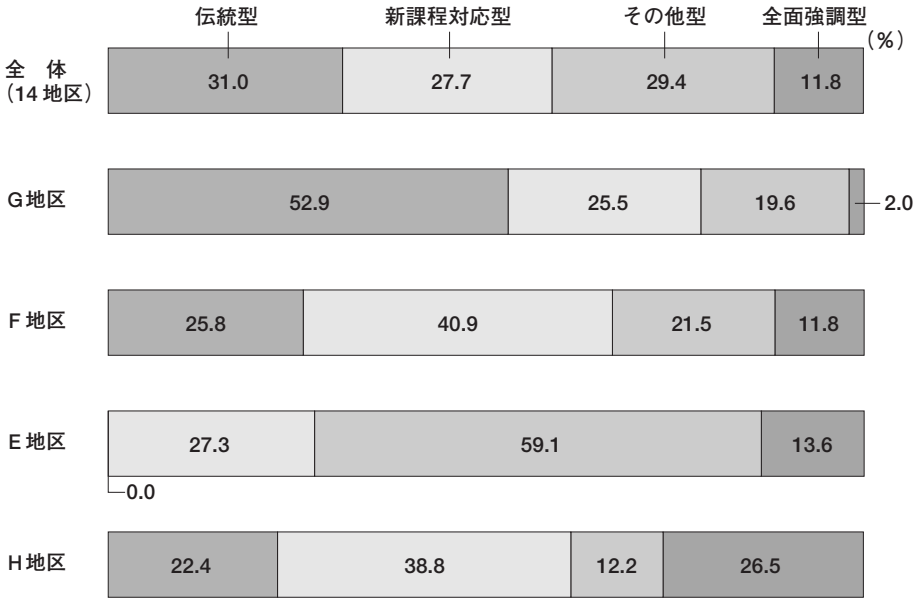
同様の作業を中学校についても行った結果が、**表２－３**である。中学校に関しては、過半数の学校が「その他型」に分類され、また「伝統型」は析出されなかった。

①「新課程対応型」（179校、30.2％）……「心の教育　豊かな心」「自ら学ぶ力　自己学習力」「健康　体力」「自立　自主　主体性」「生きる力」「思いやり」「基礎・基本」「意欲やる気」「個性　一人ひとり」「人権尊重」「地域　郷土」「奉仕　ボランティア」などの言葉。

②「全面強調型」（88校、14.8％）……すべての言葉について使用頻度が全体を上回っている類型。

③「その他型」（326校、55.0％）……上記２類型のいずれにも該当しない学校。

■図２－２　学校教育目標類型の分布（小学校／地区別）



■表２－３　教育目標の類型化（中学校）

（%）

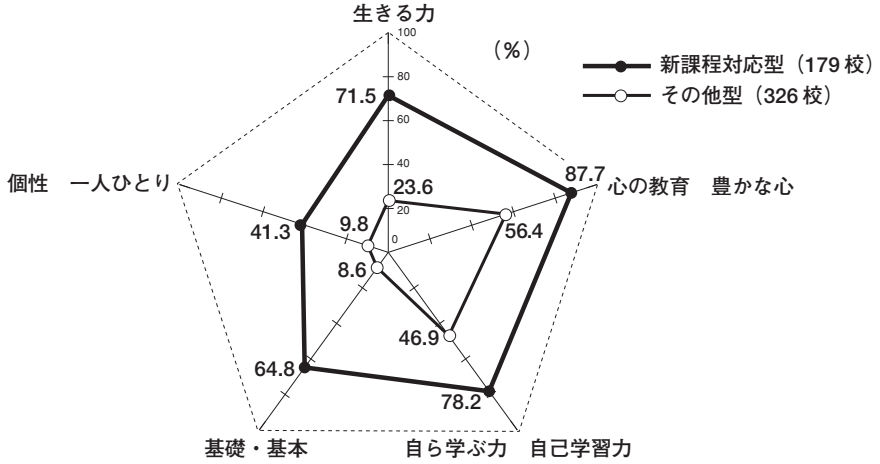
	新課程対応型（179校）	全面強調型（88校）	その他型（326校）	全体（593校）
心の教育　豊かな心	87.7	97.7	56.4	72.0
健康　体力	76.0	90.9	48.2	62.9
自ら学ぶ力　自己学習力	78.2	89.8	46.9	62.7
自立　自主　主体性	73.7	92.0	34.4	54.8
思いやり	69.3	89.8	36.5	54.3
生きる力	71.5	84.1	23.6	47.0
基礎・基本	64.8	94.3	8.6	38.3
意欲　やる気	46.4	84.1	18.1	36.4
人間性	41.3	76.1	19.0	34.2
思考力　考える力	32.4	65.9	23.0	32.2
社会性　協調性	39.1	85.2	13.8	32.0
創造性　創造力	36.9	62.5	18.7	30.7
人権尊重	40.8	71.6	13.5	30.4
個性　一人ひとり	41.3	84.1	9.8	30.4
努力　向上心　がんばる	28.5	61.4	17.8	27.5
地域　郷土	40.2	84.1	4.3	27.0
学力向上　学力定着	31.3	73.9	8.9	25.3
奉仕　ボランティア	35.2	70.5	6.1	24.5
基本的生活習慣	30.2	76.1	4.3	22.8
自律　自制	20.7	61.4	10.7	21.2
素直　明るい　朗らか	20.7	54.5	9.5	19.6
体験　体験的学習	23.5	72.7	1.5	18.7
社会規範　きまり	17.3	62.5	6.1	17.9
知性　賢さ	14.0	28.4	15.6	17.0
情緒　情操	21.2	37.5	7.7	16.2
環境　自然	17.3	55.7	2.1	14.7
学ぶ楽しさ	14.5	52.3	3.4	14.0
国際　国際社会	15.1	48.9	3.7	13.8
共生	14.0	31.8	8.0	13.3
学習習慣	8.9	42.0	3.7	11.0
興味　関心	3.9	38.6	1.2	7.6
情報化社会　情報技術　情報リテラシー	2.8	33.0	0.3	5.9
ゆとり	5.0	18.2	0.9	4.7

注１）複数回答。
注２）33の選択項目の１つにも○をつけなかった学校（無答不明10校）は分析から除外した。
注３）下線は、その言葉の出現頻度が各類型で特に大きいことを示す。

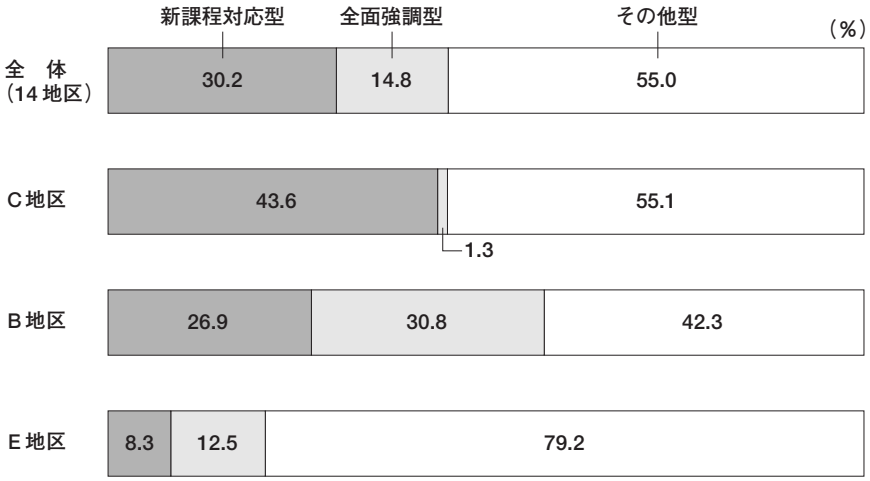
「新課程対応型」と「その他型」を対比させてみよう（**図２－３**）。「新課程対応型」では、「その他型」と比べて、「生きる力」「心の教育　豊かな心」「自ら学ぶ力　自己学習力」「基礎・基本」「個性　一人ひとり」のいずれの言葉についても、出現頻度が相当程度大きくなっている。

中学校に関しても、学校教育目標類型の分布は地区によって大きな差異がある（**図２－４**）。Ｃ地区では、「新課程対応型」が４割強を占める。Ｂ地区は「全面強調型」が３割を超えている点が特徴である。Ｅ地区は、８割が「その他型」に属する（つまり、多様な学校教育目標の設定の仕方が支配的である）。

■図２－３　「新課程対応型」と「その他型」の教育目標の違い（中学校）



■図２－４　学校教育目標類型の分布（中学校／地区別）



第２節

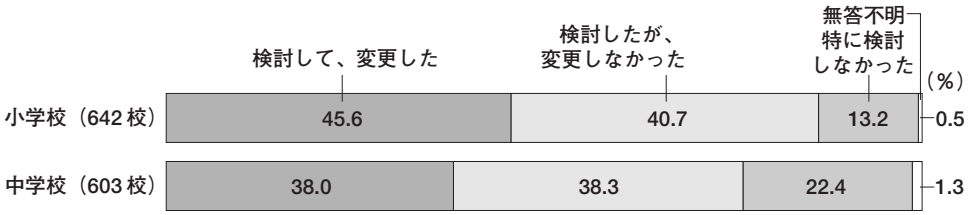
学校教育目標の変更

最近数年間は、学校教育目標の軌道修正の時期だった。学校教育目標の再検討が約８割の学校で行われ、４割前後の学校で実際に変更された。学校教育目標を再検討して変更した学校には、「新課程対応型」の教育目標類型の学校が多い。変化の方向性は、第一に「生きる力の育成」、第二に「心の教育の充実」、第三に「基礎学力の定着、学力の向上」である。学校教育目標の再検討は、管理職主導だった。

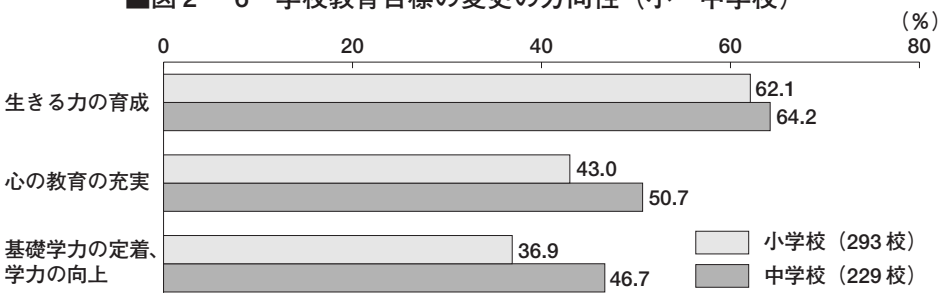
小学校では、最近数年間に、45.6%が学校教育目標を「検討して、変更した」、40.7%が「検討したが、変更しなかった」と答えており、９割弱が学校教育目標の変更を検討した。「特に検討しなかった」は13.2%にすぎない。中学校では、「検討して、変更した」38.0%、「検討したが、変更しなかった」38.3%、「特に検討しなかった」22.4%である（**図２－５**）。学校教育目標というと、校長室の額に飾られて長く変わらないというイメージがあるが、最近数年間はその再検討が約８割の小･中学校で行われ、４割前後の学校で実際に変更された。学校教育目標の軌道修正の時期だったといえる。

その変化の方向性（**図２－６**）は、第一に「生きる力の育成」（小学校62.1%、中学校64.2%）、第二に「心の教育の充実」（43.0%、50.7%）、第三に「基礎学力の定着、学力の向上」（36.9%、46.7%）である。

■図２－５　学校教育目標の変更（小・中学校）



■図２－６　学校教育目標の変更の方向性（小・中学校）

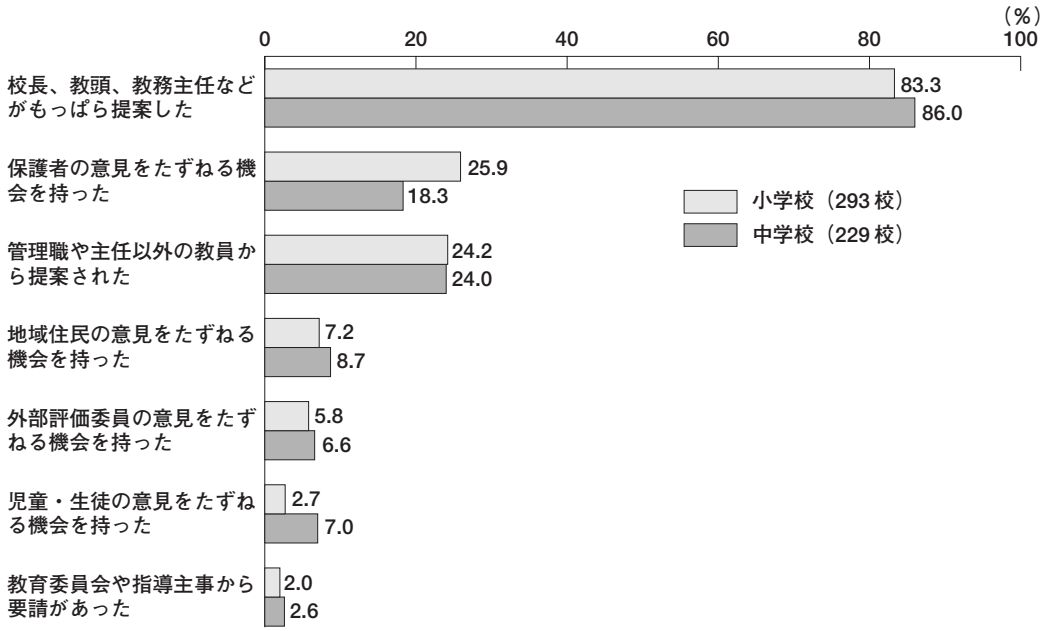


注１）学校教育目標の変更について「検討して、変更した」と回答した学校が母数となっている。
注２）選択項目に「その他」を含む複数回答。

学校教育目標の変更において、誰がイニシァティブを取ったのだろうか、あるいは誰の意見をたずねたのか（**図２－７**）。「校長、教頭、教務主任などがもっぱら提案した」は、小学校83.3%、中学校86.0%と圧倒的多数に及ぶ。「管理職や主任以外の教員から提案された」は、小・中学校とも25%程度にすぎない。最近数年間の学校教育目標の再検討は、管理職主導だった。「保護者の意見をたずねる機会を持った」のは２割前後、「地域住民の意見をたずねる機会」や「外部評価委員の意見をたずねる機会」「児童・生徒の意見をたずねる機会」を持ったのは、いずれも１割以下である。

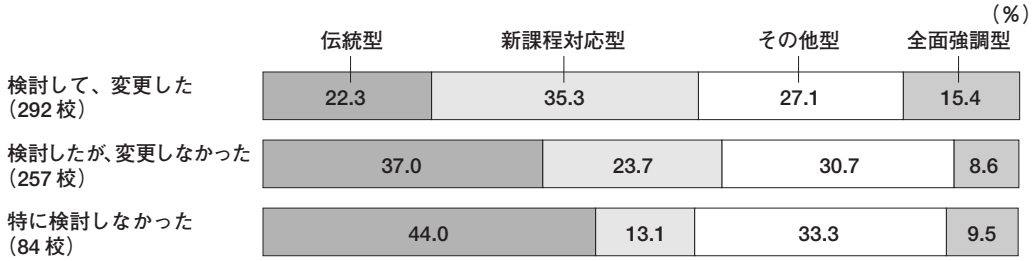
学校教育目標の類型との関連をみると（**図２－８**、**図２－９**）、「検討して、変更した」学校で、その結果として、「新課程対応型」あるいは「全面強調型」の教育目標類型の学校が多くなっている。「特に検討しなかった」学校では、小学校で「伝統型」、中学校で

■図２－７　学校教育目標の変更（小・中学校）



注１）学校教育目標の変更について「検討して、変更した」と回答した学校が母数となっている。
注２）複数回答。

■図２－８　学校教育目標の変更と類型（小学校）



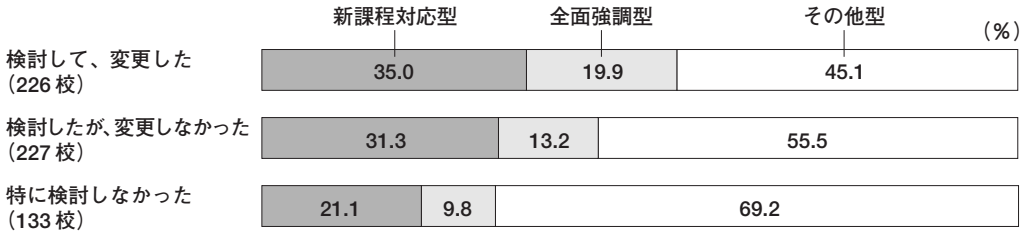
注）学校教育目標の設問に回答のなかった７校、および変更状況の設問に回答のなかった２校は分析から除外した。

「その他型」が多い。ここから、学校教育目標の検討が、学習指導要領の変更に対応した方向への修正に結びついたことが知られる。

小学校の場合、学校教育目標の変更の方向性が「基礎学力の定着、学力の向上」の場合、「新課程対応型」の教育目標類型になる傾向がある。中学校の場合は、「生きる力の育成」への変更が「新課程対応型」の教育目標類型となっている（**表２－４**）。

管理職のリーダーシップと教育目標変更の方向性の間には単純な関連はない（**表２－５**）。小学校では、管理職のリーダーシップによって教育目標が再検討された場合、「心の教育の充実」や「基礎学力の定着、学力の向上」の方向へ目標が変更される傾向がみられる。中学校では、管理職以外の教員から提案された場合に、「心の教育の充実」の方向に目標が変更される傾向がみられた。

■図２－９　学校教育目標の変更と類型（中学校）



注）学校教育目標の設問に回答のなかった10校、および変更状況の設問に回答のなかった7校は分析から除外した。

■表２－４　教育目標変更の方向性と教育目標類型（小・中学校）

（%）

		伝統型	新課程対応型	その他型	全面強調型
小学校（292校）	心の教育の充実	21.4	37.3	19.0	22.2
	基礎学力の定着、学力の向上	11.1	49.1	18.5	21.3
	生きる力の育成	23.1	34.6	25.3	17.0

		新課程対応型	全面強調型	その他型
中学校（226校）	心の教育の充実	33.3	22.8	43.9
	基礎学力の定着、学力の向上	36.2	25.7	38.1
	生きる力の育成	39.3	20.7	40.0

注）学校教育目標の変更について「検討して、変更した」と回答した小学校293校、中学校229校のうち、学校教育目標の設問に回答のなかった学校（小1校、中3校）を分析から除外している。

■表２－５　管理職のリーダーシップと教育目標変更の方向性（小・中学校）

（%）

		心の教育の充実	基礎学力の定着、学力の向上	生きる力の育成
小学校（293校）	校長、教頭、教務主任などがもっぱら提案した	43.9 ∨	38.1 ∨	62.3
	管理職や主任以外の教員から提案された	35.2	31.0	64.8
中学校（229校）	校長、教頭、教務主任などがもっぱら提案した	50.3 ∧	46.2	67.0
	管理職や主任以外の教員から提案された	63.6	49.1	65.5

注1）学校教育目標の変更について「検討して、変更した」と回答した学校が母数となっている。
注2）選択項目に「その他」を含む複数回答。
注3）∨、∧は5ポイント以上の差があったもの。

第３節

学校教育目標の類型と学習指導の実態

中学校に比べて小学校のほうが、学校教育目標と学習指導の実態との関連が強い。小学校では、「新課程対応型」の教育目標類型は、「『特色ある学校づくり』を考慮して授業時数を設定した」学校、「平日の朝読書」を実施している学校、「個別指導などの、平日の放課後の補習」を実施している学校に多くみられる。

学校教育目標は、その学校の学習指導の実態とどのような関連を持つのだろうか。

第１節で析出した学校教育目標の類型と学習指導の実態の関連を探り、有意な関連がみられた事項をリストアップしたのが、**表２－６**（小学校）と**表２－７**（中学校）である。小学校のほうがリストアップされた事項が多く、それだけ、学校教育目標のあり方と指導実態とが密接な関連を持っていることがわかる。

まず、小学校についてみると、「伝統型」の教育目標類型は、「『特色ある学校づくり』を考慮して授業時数を設定しなかった」学校、「習熟度別指導」を「実施する予定はない」学校で、相対的に多くみられる。「新課程対応型」の教育目標類型は、「『特色ある学校づくり』を考慮して授業時数を設定した」学校、「平日の朝読書」を実施している学校、「個別指導などの平日の放課後の補習」を実施している学校に多くみられる。

中学校についてみると、「新課程対応型」の学校で、「標準授業時数に配慮しつつ、従来までの学力水準を維持できるような授業時数を確保した」学校が少なくなっている。

学校でいかなる指導を行うのかを、学校教育目標が完全に決めるわけではない。しかしながら、学校評価が、学校が設定した目標に対する達成の度合いによってなされる傾向が強まっている。今後、現在以上に、学校教育目標がどう設定されるのかが重要な意味を持つ時代がやってくるだろう。

■表２－６　学校教育目標類型と学習指導の実態（小学校）

（%）

		教育目標類型			
		伝統型（197校）	新課程対応型（176校）	その他型（187校）	全面強調型（75校）
授業時数設定の方針					
標準授業時数に配慮しつつ、従来までの学力水準を維持できるような授業時数を確保した	いいえ	64.0	67.0	63.6	56.0
	はい	35.0	31.8	34.8	41.3
「特色ある学校づくり」を考慮して授業時数を設定した	いいえ	72.1	64.2	72.2	53.3
	はい	26.9	34.7	26.2	44.0
教育課程外の時間の使い方					
平日の朝読書	実施している	70.6	80.1	67.4	65.3
	実施していない	27.9	19.3	31.0	32.0
個別指導などの、平日の放課後の補習	実施している	36.0	39.8	29.9	44.0
	実施していない	58.9	58.0	66.8	50.7
習熟度別指導の実施状況	今年度実施している	38.1	42.0	40.6	46.7
	実施していないが、教員の手当ができれば実施したい	35.5	36.4	38.0	29.3
	実施する予定はない	24.9	20.5	21.4	24.0
少人数指導の実施状況	実施している	55.8	58.0	54.0	65.3
	実施していないが、教員の手当があれば実施したい	27.4	27.3	32.1	28.0
	実施する予定はない	9.1	10.2	8.6	2.7

注）教育目標の設問に回答のなかった７校を分析から除外している。

■表２－７　学校教育目標類型と学習指導の実態（中学校）

（%）

		教育目標類型		
		新課程対応型（179校）	全面強調型（88校）	その他型（326校）
授業時数設定の方針				
標準授業時数に配慮しつつ、従来までの学力水準を維持できるような授業時数を確保した	いいえ	71.5	64.8	72.4
	はい	26.3	35.2	26.4
「特色ある学校づくり」を考慮して授業時数を設定した	いいえ	65.4	52.3	66.0
	はい	32.4	47.7	32.8
教育課程外の時間の使い方				
平日の朝読書	実施している	52.0	64.8	55.5
	実施していない	47.5	34.1	43.3

注）教育目標の設問に回答のなかった10校を分析から除外している。